

ムスリム同胞団創設者ハサン・バンナーの「行動の思想」

横 田 貴 之

【要約】 本稿では、ムスリム同胞団の創設者・初代最高指導者であるハサン・バンナーの論考集の分析を通じて、彼が同胞団メンバーの個人的な信仰心をいかにして組織活動へ転化したのかを論究した。そこで明らかになったのは、バンナーが当時の社会状況に応じた「行動の思想」を新たに構築したことであった。バンナーの思想では、イスラーム世界が直面する諸問題を解決するために、イスラームの教えに基づく改革が必要とされた。そのために個人の信仰が基礎として位置付けられ、それを行動として実践する必要性が主張された。それは、個人から始まり、家族、社会、政府、イスラーム世界へ漸進的に進められるものであった。そして、行動を実践に移すための場として、同胞団が人々に提示された。バンナーの思想的特徴は、段階主義、行動主義、包括主義であり、それは信仰心を行動へ方向付ける思想、行動を実践させるための思想であった。

史料 九八巻一号 二〇一五年一月

はじめに

本稿の目的は、ムスリム同胞団 (Jam'iyā al-Ikhwān al-Muslimīn 以下、「同胞団」と略する) の創設者であるハサン・バンナー (Ḥasan al-Bannā 一九〇六―四九年) の思想分析を通じて、彼が同胞団メンバーの「信仰心 (īmān)」をいかにして組織のための行動へ転化しようとしたのかを論究することである。本稿では、アッラーへの祈りを含むムスリムの心中における信仰の確証を信仰心として位置付け、バンナー思想における個人的な信仰心と組織活動との結びつきを検討したい。

同胞団は、エジプト最大のイスラーム主義運動として知られる。一九二八年、バンナーはイスラームに基づく社会改革

とイスラーム国家の樹立を目的として同胞団を設立し、初代最高指導者 (al-rushid al-'amin) として活動した。二〇世紀前半、同胞団は急速な発展を遂げた。一九四〇年代末には、当時人口約二〇〇〇万人のエジプトにおいて、約五〇万人のメンバーと同数の支持者、およそ二〇〇〇の支部を擁する同国最大のイスラーム主義運動になったとされる^①。しかし、ナセル (Nasir, Abd al-Nasir) 在任 (一九五六―七〇年) 大統領によって、同胞団は一九五四年に非合法化され、苛烈な弾圧を受けた。続くサーダート (Muhammad Anwar al-Sadat) 在任 (一九七〇―一九八一年) およびムバラク (Muhammad Husni Mubarak) 在任 (一九八二―二〇一一年) 政権下では、非合法組織ではあったが活動を黙認された同胞団は、社会活動を通じて強固な支持基盤を再構築し、大きな動員力を誇る実質的な最大野党となった。二〇一一年の「一月二五日革命」^② によるムバラク政権の崩壊以降、同胞団はこの支持基盤を活用し、国政選挙を通じて政治的台頭を遂げた。二〇一一年―二〇一二年の人民議会・シユラー (諮問) 評議会選挙で同胞団の傘下政党である「自由公正党」は両院の第一党となり、また二〇一二年の大統領選挙では同胞団出身のムハンマド・ムルスィー (Muhammad Mursi) 在任 (二〇一二年―二〇一三年) が勝利した。二〇一三年七月の「事実上のクーデタ」とも呼ばれるエジプトの「六月三〇日革命」^③ によってムルスィー大統領は失脚し、同胞団は再び非合法化されたが、依然として同国で最重要のイスラーム主義運動であることは否めない。

同胞団の活動はエジプト一国のみにとどまっていない。一九四〇年代以降、パレスチナ、ヨルダン、シリアなどアラブ諸国で同胞団・同胞団系組織が結成され、現在も多くが主要な政治的・社会的結社として活動している。また、その思想的な影響は、アラブ諸国を越え、イスラーム世界全体にも及んでいる^④。同胞団はエジプトのみならずイスラーム世界における最重要のイスラーム主義運動の一つであるといえよう。

バンナーは、同胞団の創設者・初代最高指導者として、その死去まで活動を続けた。彼の思想は当時の同胞団の活動指針となり、組織の急速な発展を理論面で支えた。バンナーの思想的重要性は、知的エリートを中心とするマナール派^⑤のイスラーム復興思想を基礎に、民衆に立脚した運動組織としてイスラーム復興を实践するための思想を構築した点にあると

指摘されている。バンナーは、それまでの知的エリートを中心とするイスラーム復興の思想から、一般のメンバーが中心となって実践するイスラーム復興の思想を構築し、同胞団を大きな動員力を有する組織として発展させたのであった。

これまでに筆者は、ジハード (Jihad) を鍵概念としてバンナーの思想分析を行い、バンナーのジハード論では、戦闘行為のみがジハードではなく、社会改革を通じて祖国解放に貢献する同胞団の諸活動もジハードとして考えられていたことを明らかにした。「戦闘としてのジハード」と「社会運動としてのジハード」の二つの区分による議論により、同胞団の諸活動へのメンバーの動員について考察を行った^⑦。本稿では、この議論をさらに深めるために、信仰心を鍵概念として、バンナー思想においてメンバー個人の信仰心がいかに同胞団と関連付けられ、そして組織活動へ転化されたのかを論究する。

バンナーはその思想的影響力の大きさから、現代イスラームの政治思想および運動において重要な一人として認められている^⑧。また、現在の同胞団でも、バンナー思想は基本的指針として重視されている^⑨。同胞団を理解する上で、今なおバンナー思想の理解は不可欠のものといってもよい。

しかし、研究史的に見ると、その重要性にもかかわらず、バンナーに関する研究は少数である。筆者はこの問題についてかつて指摘したが^⑩、現在もその状況にはあまり変化がない。確かに、「アラブの春」前後から、同胞団・同胞団系組織の政治的台頭に伴い、同胞団を対象とする研究が多く刊行されている^⑪。しかし、その多くは近年の同胞団の政治活動に関する研究が中心で、二〇世紀の同胞団に関する研究はほとんどない。また、同胞団理解に不可欠なバンナー思想の研究に関しては、過去一〇年間で大きな変化が見られない^⑫。

バンナーに対する考察は、二〇世紀前半の同胞団を対象とする数少ない研究の中で主に述べられている。欧米では、一九六九年に刊行されたR・ミッチェルの『ムスリム同胞団』^⑬、一九九八年に刊行されたB・リアの『ムスリム同胞団——イスラーム大衆運動の勃興 一九二八―四二年』^⑭が、依然として二〇世紀前半の同胞団に関する代表的な研究である。こ

これらの先行研究の多くは歴史的記述が中心であり、詳細な思想分析には至っていない。バンナー思想は同胞団の基礎的な思想であるにもかかわらず、今なお一層の詳細な検討が必要とされる状況にある。本稿は、このような研究史上の空白を埋めるために、彼の思想について考察を試みる。

本稿では、主な資料として、バンナーの論考約二〇本が収められている『ハサン・バンナー論考集』^⑤を使用する。同書は、バンナーが主に同胞団員に向けて存命中に著した演説原稿・パンフレットを、彼の死後にまとめたものである。本稿はこの著作に基づき、バンナーがメンバーの信仰心をいかにして同胞団のための行動に結びつけたのかを論究する。本稿では、まずバンナーと初期同胞団の活動を概観した上で、バンナーの思想的背景を検討する。それを踏まえて、バンナー思想の特徴を考察し、メンバーの信仰心がいかに実践的な行動に転化されたのかを論じる。

① Richard P. Mitchell, *The Society of the Muslim Brothers*, London: Oxford University Press, 1969, p. 328.

② ムバラク政権崩壊の発端となった大規模な抗議デモが一月二五日に始まったことから、エジプトでは一般的に「一月二五日革命」と呼ばれる。なお、我が国では、「エジプト革命」の呼称が一般的である。

③ この出来事を「クーデタ」と呼ぶか否かについては、エジプト国内では見解の相違がみられる。世俗主義者・軍支持者などは、ムバラク政権崩壊をもたらした二〇一一年の「一月二五日革命」に続く「第二の革命」とこれを位置付け、ムルシー政権崩壊の契機となった大規模デモの実施日にちなみ「六月三〇日革命」と呼ぶ。他方、同胞団支持者らは「クーデタ」という呼称を用いている。

④ たとえば、同胞団系組織であるパレスチナのハマスやヨルダンのイスラーム行動戦線党は、政権与党となった経験を持つ。シリア同胞団は、アサド政権に対する反体制派の有力組織として活動している。また、インドネシアではバンナーの著作の翻訳版が多数発行されてお

り、同胞団の思想的影響を受けた福祉正義党 (PKS) が有力政党の一つとして活動している。

⑤ ラシード・リダー (Muhammad Rashid Rida 一八六五—一九三五年) が主筆を務めた『マナール (al-Manār)』誌に集った人々を中心とするイスラーム復興の主要な潮流。詳しくは、小杉泰『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版社、二〇〇六年、二二—二四頁。

⑥ 小杉泰『ムスリム同胞団の運動と展開をめぐって』小杉泰編『ムスリム同胞団——研究と課題の展望』国際大学国際関係学研究所、一九八九年、五七頁。

⑦ 横田貴之『ハサン・バンナーのジハード論と大衆的イスラーム運動』『オリエン』第四六巻第一号、二〇〇三年、八三—一〇二頁。横田貴之『現代エジプトにおけるイスラームと大衆運動』ナカニシヤ出版、二〇〇六年、六一—八二頁。

⑧ 一例を挙げると、イスラーム復興思想に大きな軌跡を残した思想や活動を分析する研究書において、バンナーは、アフガニー (Ghani

al-Din al-Afghani 一八三八/九〇九七年)、アブドゥッ(Muhammad 'Abduh 一八四九—一九〇五年)らイスラーム復興運動の先駆者やバンナー後の同胞団で活躍したクトゥブ(Sayyid Qutb 一九〇六—六六年)などと並んで、九人の中の一人として取り上げられている。Ali Rahmena ed., *Pioneers of Islamic Revival*, London & New Jersey: Zed Books, 1994.

- ⑥ 例えば「エジプト同胞団副最高指導者ジュムア・アミン・アブドゥッハルアズィーズ(Jum'a Amin 'Abd al-'Aziz)」は「筆者とのインタビュで」「創設から現在に至るまで、バンナー思想は同胞団のあらゆる活動の基礎をなしており、メンバーにとつての必読書である」と述べた(二〇一四年八月一日、ロンドン市内の「国際メディアサービス(International Media Services)」においで)。また、同胞団の公式ウェブサイトで、バンナーに関するセクションが必ず設けられており、幹部メンバーによるバンナーに関する寄稿・解説が盛んである。詳しくは、次の「ムスリム同胞団本ウェブサイト(Ikwan Un Lāyn)」を参照。http://www.ikwanonline.com/

- ⑦ 横田「現代エジプト」六—九頁。

- ⑧ その一部として、例えば Barry Rubin ed., *The Muslim Brotherhood: The Organization and Policies of a Global Islamist Movement*, New York: Palgrave Macmillan, 2010; Alison Pargeter, *The Muslim Brotherhood: The Burden of Tradition*, London & Saint Paul: Sagi Books, 2010; Mariz Tadros, *The Muslim Brotherhood in Contemporary Egypt: Democracy Redefined or Confined?*, London & New York: Routledge, 2012; Carrie Rosefsky Wickham, *The Muslim Brotherhood: Evolution of an Islamist Movement*, Princeton & Oxford: Princeton University Press, 2013.

- ⑨ 過去約一〇年間、我が国では一定の研究成果の蓄積が見られる。そ

の例として、古林清一「一九三〇年代におけるムスリム同胞団」『西南アジア研究』第五七号、六七—七九頁、二〇〇二年・古林清一「ムスリム同胞団第五回総会——そのイデオロギー」『関西アラブ・イスラム研究』第三号、二〇〇三年、四三—五六頁・横田「現代エジプト」・横田貴之「原理主義の潮流——ムスリム同胞団」山川出版社二〇〇九年・福永浩一「初期ムスリム同胞団関連資料——「ハサン・バンナー」著『タアワと教宣者の回想』を中心に」(S.I.A.S.ワーキンググループ・シリーズ七)上智大学アジア文化研究所・イスラーム研究センター、二〇一三年。なお、同胞団の著名なイデオログであるクトゥブや第二代最高指導者ハサン・フタイベー(Hasan al-Hudaybi 一八九一—一九七二)に関しては、一定の研究の進展がみられる。例えば Barbara H. E. Zollner, *The Muslim Brotherhood: Hasam al-Hudaybi and Ideology*, London & New York: Routledge, 2009; John Calvert, *Sayyid Qutb and the Origin of Radical Islamism*, New York: Columbia University Press, 2010.

- ⑩ ミッチェルの著作は、一九五四年のナガルによる弾圧までの同胞団に関する代表的な研究とされている。Mitchell, *The Society of the Muslim Brothers*. 一九六〇年代までに刊行された他の主な同胞団研究として、Ibnak Musa Husani, *The Moslem Brethren: The Greatest of Modern Islamic Movements*, Beirut, 1956; Christina Phelps Harris, *Nationalism and Revolution in Egypt: The Role of the Muslim Brotherhood*, the Hague, 1964.

- ⑪ Brynjar Lia, *The Society of the Muslim Brothers in Egypt: The Rise of an Islamic Mass Movement 1928-1942*, Reading: Ithaca Press, 1998.

- ⑫ バンナーの論著集には複数の版があるが、本稿では次の版を使用する。Hasan al-Banna', *Maḥmūd a Rasā'il al-Imām al-Shahīd Hasan al-Banna'*, Alexandria: Dar al-Da'wa, 1998. また、筆者は訳者代表の一人

として同論考集の翻訳プロジェクトに参加しており、その成果は上下巻として刊行予定である。本稿における論考の訳文は基本的にこの訳本に基づいている。ハサン・バンナー(北澤義之・高岡豊・横田貴之

編訳)『ハサン・バンナー論考集——ムスリム同胞団の思想』岩波書店(上巻は二〇一五年三月、下巻は二〇一六年度中に刊行予定)。

第一章 バンナーと初期ムスリム同胞団

本章では、バンナーの生い立ちと、彼の指導下にあった初期同胞団の発展について概観する。

一九〇六年、ナイル・デルタに位置するブハイラ県のマフムディーヤにおいて、バンナーは時計職人アフマド・アブドゥッラフマーン・バンナー・サーアーティー(Ahmad 'Abd al-Rahmān al-Bannā al-Sā'ī)の長男として誕生した。バンナーは、かつてアズハルに学んだ父から、イスラームに関する基礎的な教育を受けた。クルアーン学習を中心とする初等教育機関である村のクッターブでは、村のシャイフ(長)であるムハンマド・ザフラーン(Muhammad Zahrān)に学んだ。その後、公立学校に入学したバンナーは学業に励みつつ、イスラーム的道德心の向上を目指す団体に加入した^①。彼のイスラームへの関心はスーフィー教団にも向き、ブハイラ県の県庁所在地ダマンフルを本拠地とするハサーフィーヤ教団にも加入した。一九二三年、高等師範学校ダール・アル＝ウルーム(Dar al-'Ulūm)^②入学のためにバンナーはカイロへ移った。在学中、彼は「マナール派」のサラフィー主義の影響を受けた^③。また、一九二七年のムスリム青年協会(Ḥamīyah Shubbān al-Muslimīn, YMMA: Young Men's Muslim Association)^④の設立に際して、メンバーらと交友関係を持っていたバンナーはその一員として貢献した。

一九二七年、ダール・アル＝ウルームを卒業したバンナーは、アラビア語教師としてスエズ運河沿いの町イスマリーリーヤに赴任した。彼は、ダール・アル＝ウルーム在学中に行っていた一般民衆に向けた「カフェ説法」を、イスマリーリーヤへの赴任後も続けた^⑤。一九二八年、バンナーの説法に感銘を受けた聴衆の六人が彼を訪れた。バンナーの自伝

によれば、六人はバンナーに「自分達の指導者になって欲しい」と依頼した。喜んだバンナーは、彼らとともに「神の道」に励むことを誓い、「イスラームのために奉仕するムスリムの同胞たち」として同胞団を結成した。イスマリーリーヤに本部を置いた同胞団は、スエズ運河地帯を中心に、説教、教育活動、モスクの建設・運営など地域密着型の活動を行った。^⑦

一九三二年、バンナーの転勤に伴い、同胞団の本部もカイロへ移転した。カイロ移転以降、同胞団はカイロを拠点にエジプト各地に支部を設立し、全国規模の組織へ発展した。他のイスラーム主義運動がほとんど進出していなかった上エジプト（ナイル川上流域）にも進出し、一九三〇年代後半以降はミンヤーやアシュートなどに多くの支部を設立した。バンナーは精力的にエジプト各地へ演説旅行に出かけた。また、同胞団はモスク運営や教育活動などに限定されない様々な社会活動を行った。同胞団は多数のメンバーの獲得に成功し、急速に勢力を拡大した。上述のように、メンバー・支持者は約一〇〇万人に達したとされる。ミツチエルによれば、同胞団支部数は、一九二九年四、一九三〇年五、一九三一年一〇、一九三二年一五、一九三八年三〇〇、一九四〇年五〇〇、一九四九年二〇〇〇と急増した。^⑧ 同胞団の力の源は、多数のメンバーを組織活動に動員できた点にあった。当時の同胞団において、バンナーの思想は組織活動の基本指針を示すものとして重視され、彼の演説原稿や論考はメンバーの必読書であった。^⑨

一九三〇年代後半以降、同胞団では政治活動の比重が次第に高まった。一九三九年の第五回総会において、バンナーは、シャリーア（イスラーム法）に基づく統治はイスラームにおける要請であるにもかかわらず、「イスラームの改革者達が統治の要請について何もしないことはイスラーム的な罪」であり、その罪を贖うためにもシャリーアに基づく統治に向けて行動するとした。^⑩ 一九四一年の第六回総会においても政治活動の重要性が確認され、同胞団思想の教宣（*Bayan*）のために議会闘争も含めた可能な限りの手段をとること、そして「国家にとって適当な時期に議会への同胞団立候補者が出るであらう」ことが述べられた。^⑪ 大きな動員力を有する同胞団の選挙への参加表明は、ワフド党党首ムスタファー・ナッハー

ス (Musjida al-Nahhas 一八七九―一九六五年) に危機感を与えた。彼は、同胞団の選挙参加を撤回させるための交換条件として、同胞団の求めるアルコール販売、売春、賭博の規制法案を受け入れた。¹²⁾ その後も、同胞団では政治活動の比重は高まりつづけ、一九四五年度の議会選挙ではバンナーら同胞団メンバーが立候補した。¹³⁾

一九四〇年代後半、同胞団においては政治的活動が優越するようになり、次第に政府や一部有力政党・政治勢力との緊張関係が強まっていた。そうした状況下、当初は「イスラームの外敵」と戦うことを目的に同胞団内で設立された「秘密機関 (al-Nizam al-Sirr)」¹⁴⁾ が、政府要人の暗殺などの過激な行動を起こすようになった。同胞団は総会から選出された指導局が、最高指導者であるバンナーを中心に執行部として組織運営にあたっていた。しかし、この秘密機関は指導局の指揮に属さず、やがて独走を始めた。一九四八年に同胞団が政府によって非合法化されると、秘密機関メンバーがヌクラシー (Mahmūd Fahmī al-Nuqrashī 一八八八―一九四八年) 首相を暗殺するに至った。その翌年、バンナーはその報復として秘密警察によって暗殺された。

組織運営の中心であったバンナーを喪った後、同胞団の指導部は混乱に陥ったが、穏健派のハサン・フダイビー (Hasan al-Hudaybi 一八九一―一九七三年) が第二代最高指導者に選出された。¹⁵⁾ フダイビーら同胞団指導部は合法路線を志向したが、秘密機関など急進派を抑制することはできなかった。バンナーという組織運営の要を失ったことが、同胞団の内部矛盾をさらに深刻化させたといえる。同胞団にとつてのバンナーの重要性がうかがえよう。その後、同胞団は内部分裂状態のまま一九五二年革命を迎えた。革命に際して、ナセルら自由将校団の権力掌握によって、政治体制は王制から共和制へ移行した。革命直後、同胞団は革命評議会と一時友好関係を保ったが、一九五四年のナセル暗殺未遂事件を契機に再び非合法化され、同胞団は激しい弾圧下に置かれることとなった。

① Mitchell, *The Society of the Muslim Brothers*, pp. 1-2.
② ダール・アル・ウルームとは日本語では「諸科学の館」の意味で、

一八七一年に近代化政策の一環として設立された高等師範学校であった。一九四六年にカイロ大学に統合された。

③ Husaini, *The Moslem Brethren*, pp. 7, 30-31. なお、サラフィー主義とは、イスラームの初期世代 (salaf) を模範としてイスラーム改革を目指す思想潮流を意味する。

④ ムスリム青年協会はサラフィー主義の流れを汲む組織であり、西洋文化の流入やキリスト教布教活動への反対運動、イスラーム教育の実施やムスリムの道徳心向上を目指した。

⑤ バンナーは、自らの主張を訴えかける場として、従来用いられていたモスクのみでなく、社交場であるカフェを積極的に利用した。筆者がこれまで同僚団メンバーに行ってきたインタビューにおいても、この「カフェ説法」はバンナーの活動の特徴づけるものとしてしばしば言及される。バンナーの生い立ちからイスマリーリヤでの「カフェ説法」までについて詳しくは、次を参照。小杉泰・横田貴之「行動の思想、思想の実践——バンナーとクトゥブ」小松久男・小杉泰編『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会、二〇〇三年、四一—四三頁。

⑥ Hasan al-Banna, *Mudhakkirat al-Da'wa wa al-Da'iya*, Cairo: Dar al-Tawzi' wa al-Nashr al-Islamiyya, n.d., pp. 83-84; 福永浩一「初期ムスリム同僚団」三三—三三頁。

第二章 バンナーの思想的背景

バンナーは、同僚団の最高指導者として組織運営に努める一方、組織活動を理論面から支える思想を様々な論考に示した。バンナーの思想を端的に表現すると、それはイスラームの教えに基づく社会改革であり、同僚団を運営するための実践的な思想であり、メンバーが同僚団という組織において実際に改革のための指針であった。バンナーが社会改革を必要と考えた背景には、当時のエジプトを含むイスラーム世界の状況があった。本章では、当時の社会状況を

⑦ イスマリーリヤ時代の活動について Lia, *The Society of the Muslim Brothers*, pp. 35-43.

⑧ Mitchell, *The Society of the Muslim Brothers*, pp. 294.

⑨ 二〇一四年八月一四日、筆者によるアブドゥルアズィズへのインタビュー。

⑩ al-Banna, "Risāla al-Mu'tamar al-Khāmis," *Majmū'at*, p. 188.

⑪ al-Banna, "Risāla al-Mu'tamar al-Sādis," *Majmū'at*, p. 322.

⑫ Harris, *Nationalism and Revolution in Egypt*, pp. 182-183.

⑬ Mitchell, *The Society of the Muslim Brothers*, p. 33. 選挙結果は「同僚団立候補者全員の落選となった。ミッチェルは大規模な不正行為が行われたとされている」。

⑭ Mahmūd 'Abd al-Halīm, *al-Ikhwān al-Muslimīn: Ahādith Šana'at al-Tarīkh, Ru'ya min al-Dakhl*, Vol. 1, Alexandria: Dar al-Da'wa, 1979, pp. 210-211; Mahmūd Jamī, *Wa 'Arafu al-Ikhwān*, Cairo: Dar al-Tawzi' wa al-Nashr al-Islamiyya, 2004, p. 45.

⑮ 選出者の経過については Mitchell, *The Society of the Muslim Brothers*, pp. 84-88; Harris, *Nationalism and Revolution in Egypt*, pp. 187-188.

バンナーがどのように認識していたのかを検討し、彼の思想的背景を考察する。

第一節 西洋諸国によるイスラーム世界の支配

一九世紀は、西洋諸国によるイスラーム世界の植民地化・隷属化が進んだ時代であった。フランスによるアルジェリア植民地化(一八四七年)、オスマン朝の財政破綻と英仏による財政管理の開始(一八八一年)、ロシア軍による中央アジア制圧(一八八一年)、イギリスによるエジプト軍事占領(一八八二年)などにみられるように、イスラーム世界の各地が次々と西洋列強の支配下に置かれた。このようなイスラーム諸国の崩壊と植民地化によって、社会においてイスラーム的諸制度が実践されなくなるという事態が引き起こされた。それまでのイスラーム史上においては、どれほど強い権力を持った圧制者であっても、社会がイスラーム的価値によって規定されている以上、その価値観の否定はできなかった。しかし、西洋諸国による支配は、社会のあり方を規定してきたイスラームの教えを否定するもので、イスラーム世界にとって未曾有の危機であった。

バンナーは、こうした西洋諸国によるイスラーム世界の支配について、しばしばその論考で言及している。「昨日と今日の間に (Bayna al-Aims wa al-Yawm)」では、次のように述べている。

ヨーロッパは支配を広げた。それは、土地の発見・攻撃「による強奪」による成果であり、遠く離れたインドや周辺イスラーム諸州など遠方にある多くのイスラーム国家への遠征の成果であった。そして、力強く広大なイスラーム国家の分割へ至る活動を本格的に開始し、そのために多くの計画を策定した。それは時に「東方問題」と、別の機会には「ヨーロッパの」病人トルコの分割」と表現された。どの「ヨーロッパ」国家も幸先良い機会を獲得し、根拠のない理由を不当に設定した。平和で緩慢なイスラーム国家を攻撃し、国境の一部を後退させ、その周縁部を脅かした。猛攻撃は長い期間にわたって続き、オスマン帝国は多くのイスラームの領土を剥ぎ取られ、それらの地域はモロッコや北アフリカのようにヨーロッパの支配下へ移った。かつてオスマン朝の支配下にあった

いくつかの非イスラームの地域、たとえばギリシャやバルカン諸国は、この時期に独立した。^①

「昨日と今日の間で」では、この後に、北アフリカ諸国、エジプト、スーダン、パレスチナ、シリア、イラク、ヒジャーズ地方、イエメン、アラビア半島、イラン、アフガニスタン、インド、中央アジアなどイスラーム世界各地の現状に関する解説が続いている。「イスラーム体制の下における我々の問題 (Mushkiratunā fi Daw' al-Nizām al-Islāmī)」でも、アラブ諸国・イスラーム世界に対する西洋諸国の植民地支配について述べてられており、パレスチナ問題やオランダによるインドネシア支配への言及も見られる。また、「青年へ (Ilā al-Shabab)」では次のように、西洋諸国の支配がもたらす危機を指摘している。

イスラームとムスリムに対して、大きな出来事が連続して起こり、大災難が次々に発生する時代がすでに到来している。イスラームの敵は、イスラームの恩恵を根絶やし、その美しさを覆い隠し、ムスリムを誤った方向へ導こうとし、イスラームの「およぶ」領域を破壊し、その戦士を弱めようとしている。……植民地主義を掲げる劣等な不信仰者の手中に、イスラーム諸国を陥れようと励んでいる。^③

このように、バンナーは当時のイスラーム世界が直面する西洋諸国による支配に対して批判的な見解を持っており、それによってもたらされるイスラーム世界の危機を強く認識していた。バンナー思想の背景には、このようなイスラーム世界に関する現状認識があった。彼が活動したエジプトは、一九二二年に名目的な独立を果たしていた。しかし、この独立に際しては、①エジプト領内におけるイギリスの移動・通信の自由、②イギリスによるエジプトの防衛、③外国人の権利と少数派の保護、④イギリスのスーダン統治の四点が留保された。イギリス軍の駐留も継続されたため、エジプトの独立は名目的なものにとどまっていた。^④このため、当時のエジプト人にとっては、西洋諸国による支配は実際の問題として強く認識されていた。バンナーはエジプト人のこの危機感に訴えかけたのであった。

第二節 欧化主義・政教分離への批判

一九二〇世紀前半のイスラーム世界において、西洋諸国による支配に対抗する方策の一つとして、西洋諸国をモデルとする近代化・西洋化を挙げることができる。^⑤ エジプトにおいても、ムハンマド・アリー朝(一八〇五―一九五三年)の下、工業化の進展、教育制度の近代化、西洋的諸制度の導入など西洋化・近代化が志向されていた。^⑥ ここで注意したいのは、バンナーは西洋文明の所産を導入することに完全に反対していたわけではないことである。彼は西洋近代的な教育のパイオニアである高等師範学校の出身であった。また、スーツとネクタイをしばしば着用し、同胞団の活動では雑誌や新聞など西洋からもたらされたメディアを同胞団の教宣に活用するなど、西洋文明の所産を受け入れることを否定しなかった。彼が否定したのは、イスラームの教えを放棄して西洋を模倣する欧化主義の潮流であり、西洋からもたらされた政教分離の考えに強く反対した。マナール派も世俗主義論者との論争を行っており、バンナーにもその影響を指摘できる。^⑦ バンナーは、「昨日と今日の間で」で、西洋文明の特徴を次のように指摘している。

ヨーロッパ文明の最も重要な特徴は、次のとおりである。①背教、アッラーへの懷疑、精神の否定、世界にやがて来る報奨と罰への無関心。物質、有形の存在への執着。……②不信仰、快樂への不相応な奉仕、放縱。……③利己主義。あらゆる人は自己のために良いことを欲する。階級的な利己主義……国家的な利己主義……④利子。それを合法的と認め、商業取引の原理と見なし、多様な形態によって実施する。^⑧

「光へ向かって (Nahwa al-Nur)」においても、西洋文明の問題点が指摘されている。

西洋文明はその科学的な卓越性によって長い間輝いてきた。科学のもたらす成果によって、全世界を従属させてきた。しかし、現在、西洋文明は破綻し、退潮の中にある。その原則は崩壊し、その体制と規則は破壊されている。その政治的基礎は、「ファシズムなどの」独裁制によって破壊されている。

経済的基礎は、危機により吹き飛ばされている。何百万もの哀れな失業者や飢えた者が西洋文明に反対する証言をしている。逸脱するイデオロギーや各地で発生する革命は、その社会的基盤を根絶やしにしている。人々はこれ「[ら諸問題]」へのどのように対処すべきか「という状態」に陥り、道に迷っている。^⑨

そして、バンナーは政教分離の考えについて、「イスラーム体制の下における我々の問題」で次のように批判している。

次のように言われるかもしれない。それはどういうことか、全世界の近代的生活は、いかなる面においても宗教を基盤としていない。すでに世界の諸国家は、社会生活を宗教から分離し、生活の諸相から宗教を消去し、宗教・信徒と神へ繋ぐ唯一の窓口を「個人の」内面と礼拝所に限定することに同意したと。現在、世界の諸国家の手中には、国民と民衆の力を導く鍵となる力があると。

このようなことを言う者たちは、「イスラーム」のことを理解していない。イスラームの教えや裁定を学んでいないし、イスラームの正しい性質や穏当な規則をいまだ理解していない。彼らは、イスラームが宗教・社会・礼拝所・国家・現世・来世であることを理解していない。また、イスラームが、心の平安・精神生活・アッラーの監督・精神の清浄を柱として「信仰と実践という」二つの道を確立したとしても、信仰上の諸活動よりも実践的な現世の生活に関心を抱いたことを理解していない。宗教は、このようなイスラームの制度の一部である。イスラームこそが現世を完全に律するのと同様、宗教も律するのである。我々はムスリムとして、我々の宗教と現世がイスラームの原則に従うことを要求する。^⑩

「青年へ」においても、同様の主張がみられる。

我々「同胞団」は、政教の分離が正統イスラームの教えによるものではないと理解している。自らの宗教「イスラーム」に忠実で、イスラームの精神と教えを理解したムスリムは、それ「政教分離」を知ることはない。そして、我々が転向することを望む者は、我々を「その方法論から」引き離そうとしている。その者は、イスラームの敵かイスラームを知らない者のどちらかでありえない。^⑪

バンナーはこのように西洋文明や政教分離の問題点を指摘した上で、西洋に追従する欧化主義を厳しく批判する。例え

ば、「クルアーンの旗下にあるムスリム同胞団 (al-Ikhwān al-Muslimūn tahta Rāya al-Qur'ān)」では、次のように述べている。

現状への無関心、イスラーム諸国家の幻想、贅沢と享楽への耽溺の中で、横暴で強力なうねりと破壊的で強力な「西洋の」潮流が、思慮深い「イスラームの」知性よりも優勢であったことを我々は認める。「西洋の」諸原則と唱導が確立され、規則と哲学が明示され、文明が形成された。これら全ては、その息子たち「ムスリム」の胸中で、イスラームの思想と競合した。イスラームの地の中心へのこの「西洋」諸国が侵攻し、あらゆる所からムスリムを包囲し、ムスリムの国土、家、部屋へ押し入った。そして、ムスリムの心、知性、聖地までも占領した。彼らは誘惑、扇動、力、権威を獲得する準備ができていた。それは、ムスリムが事前に準備できなかったものである。「その結果、」西洋諸国はイスラーム諸国を完全に破壊した。イスラーム諸国のうちで中核を担う国々が誤って導かれた。それにより、他の残りのイスラーム諸国は深刻な影響を受け、イスラームから離れた雑多な世代がイスラーム諸国で台頭した。彼らは国家に関わる諸事を指導し、思想的・精神的・政治的な実践の場で主導的な地位を占めた。

……我々は、次のようなことを知っている。すなわち、我々がイスラームの導きや原理原則から遠ざかったこと。イスラームは我々が有益なことを学ぶのを拒絶しないこと。我々が叡智を獲得することを拒まないこと。しかし、イスラームは、アッラーの宗教「イスラーム」と無関係なものの模倣・信仰・義務・規定・裁きを拒否する。^⑩

当時のイスラーム世界において、こうした問題は現実的なものであった。オスマン帝国の解体に伴いカリフ制は廃止され、西洋近代化によって伝統的なイスラームの秩序は解体した。バンナーの批判は新生トルコ共和国で近代化を進めるケマル主義者にも向けられた。

一部のイスラーム国家は、ヨーロッパ文明への称賛と、自らのイスラーム的色彩への失望について極端になりすぎた。その点につき、トルコが自身を非イスラーム国家と宣言し、最大の厳格さで全ての行為においてヨーロッパ人を模倣した。……「西洋文明の」影響が強大で、環境や外見の変化と同様に、心や聖域まで達した国。その中にはトルコとエジプトがあり、すでにこれらの国におけるイスラーム思想の影響はあらゆる社会環境から排除されている。イスラーム思想はモスク、ザウイヤ、リバート^⑪、修道場の中へ

引き下がった。⁽¹⁴⁾

このように、バンナーにとって、イスラームの教えを否定する欧化主義や政教分離の考えは決して受け入れられないものであった。欧化主義や政教分離の考えが広まりつつあったことは、バンナーが同胞団を創設する契機の一つとなった。⁽¹⁵⁾

第三節 イスラームの道

バンナーは、エジプトを含むイスラーム世界の危機的状況について、人々に対して平易かつ明快に説明を行った。西洋の支配はイスラーム諸国のあらゆる分野に及び、西洋諸国はアルコール、利子、無神論などの悪習を持ち込み、エジプトの行政、司法、教育などを恣意的に変更していると訴えかけた。⁽¹⁶⁾これらは、いずれも当時のエジプト人にとって具体的なイメージを喚起する「脅威」であった。それを克服する唯一の道こそが「イスラームの道 (ṭarīq al-islām)」であると、「光へ向かって」では説いている。

あなたがたは国家とともに新しい時代に直面しており、あなたがたの前には二つの道がある。そのいずれも、あなたがたをして国家の方向付けをさせ、その道に従わせるものである。また、そのいずれも、特徴・長所・影響・結果・宣伝すべきものを伴っている。一つは、イスラームの道とその原則・規則・文化・文明である。もう一つは、西洋の道 (ṭarīq al-gharb) とその生活の諸相・制度・方法論である。最初の道、すなわちイスラームの道、規則、原則が進むべき唯一の道であり、現在と将来の国家をそれに向けて方向づけなければならない、と我々は信じる。

もし我々がこの道を国家とともに進めば、多くの利益を得ることができよう。イスラーム的な方法論は、これまでも実践されてきており、歴史がその健全さを明証している。……我々がこの道を進むならば、この「イスラームの」道を知らず進むことのできない他の諸国家が陥る死活的な問題を回避できる。そして、現行の制度が解決できない込み入った諸問題の多くを解決できる。⁽¹⁷⁾

バンナーは、当時隆盛を誇っていた欧化主義や政教分離に批判的であり、彼は自らの思想をイスラームに基づくもので

あると考えていた。

我々の思想は純粹にイスラーム的なものである。それは、イスラームに基づき、イスラームから導き出され、イスラームのために奮闘し、イスラームの教えの称揚のために行動する。制度においてイスラームを放棄してはならない。導きとしてイスラーム以外に満足してはならない。統治においてイスラーム以外に従ってはならない。^⑬

さらに、バンナーは、「イスラームの道」に従う同胞団の目標とは次の二点であると述べている。

あなたがたのための二つの根本的な目標を常に心に留めておくように。(一)イスラームの祖国が全ての外国支配から解放されること。それは不正な圧制者や搾取する征服者以外は否定しない、全人類が有する自然の権利である。(二)この自由な祖国において、自由なイスラーム国家は建設される。イスラームの指針に従い行動し、その社会制度を普及させ、正しい諸原則を告知し、賢明な教宣を人々に伝える。^⑭

なお、この「イスラームの道」とは、伝統墨守的なイスラームを意味しない。「ムスリム同胞団が最も恐れることは、イスラーム的東洋の人々が伝統墨守 (aqd) の潮流に進み、この古い秩序によって復興を図ることである。この古い制度は、自己矛盾をきたしており、墮落して無益だということがはつきりしている」。^⑮ここに、西洋諸国による支配など現実的な問題に対処できなくなってしまったアズハルやスーフィー教団のような伝統的な伝統墨守派と同胞団との違いを指摘することもできよう。かつてマナール派は伝統墨守派との論争を通じてイスラーム改革の考えを明確化したが、バンナーの「イスラームの道」も同様に時代に適応したイスラーム改革を目指したのであった。

① *al-Bannā, "Bayna al-Ams wa al-Yawm," Majmū'a, pp. 146-148.*

② *al-Bannā, "Mushkirātunā fī Daw' al-Nizām al-Islāmī," Majmū'a, pp. 207-208.*

③ *al-Bannā, "Ilā al-Shabab" Majmū'a, pp. 95-97.*

④ 松本弘「民主主義の受容と混乱—エジプト—一九二三年憲法」私市正年・栗田楨子編『イスラーム地域の民衆運動と民主化』東京大学出

版会、二〇〇四年、八二頁。

⑤ 小杉泰は、一九世紀以降の中東の在り方を規定する力として、西洋化・近代化、民族主義、イスラーム復興の三つのベクトルという分析モデルを提示した。小杉泰『現代中東とイスラーム政治』昭和堂、一九九四年、一〇—一二頁。

⑥ 横田『現代エジプト』二四—三二頁。

- ⑦ 小杉『現代中東』一〇五一―一〇九頁。
- ⑧ *al-Bannā*, "Bayna al-Ams wa al-Yawm," *Majmū'a*, p. 150.
- ⑨ *al-Bannā*, "Naḥwa al-Nūr," *Majmū'a*, pp. 67-68.
- ⑩ *al-Bannā*, "Mushkīrātunā fī Daw' al-Niẓām al-Islāmī," *Majmū'a*, p. 213.
- ⑪ *al-Bannā*, "Ilā al-Shabāb," *Majmū'a*, p. 97.
- ⑫ *al-Bannā*, "al-Iktiwān al-Muslimūn taḥta Rayā al-Qur'ān," *Majmū'a*, pp. 106-107.
- ⑬ ザーウィヤ、リバートはスーフィー教団における集会所、修行場である。
- ⑭ *al-Bannā*, "Bayna al-Ams wa al-Yawm," *Majmū'a*, p. 152.
- ⑮ 飯塚正人『現代イスラーム思想の源流』山川出版社、二〇〇八年、七八―七九頁。
- ⑯ *al-Bannā*, "Bayna al-Ams wa al-Yawm," *Majmū'a*, pp. 151-153.
- ⑰ *al-Bannā*, "Naḥwa al-Nūr," *Majmū'a*, pp. 66-67.
- ⑱ *al-Bannā*, "Ilā al-Shabāb," *Majmū'a*, p. 93.
- ⑲ *al-Bannā*, "Bayna al-Ams wa al-Yawm," *Majmū'a*, p. 154.
- ⑳ *al-Bannā*, "Ilā ayyi Shay' u Nad'u al-Nāss," *Majmū'a*, p. 52.
- ㉑ 同胞団におけるアズハル機構やスーフィー教団に対する姿勢・見解については、Mitchell, *The Society of the Muslim Brothers*, pp. 211-217.
- ㉒ 小杉『現代中東』一〇九―一一頁。

第三章 バンナーの行動の思想

バンナーの示した「イスラームの道」に従った改革を実現するためには、実際の行動を起こすことが必要となる。その行動を実践する場として創設されたのが同胞団であった。「同胞団の思想はマナール派の単なる大衆化ではなく、マナール派思想はすでに達成された基礎理論であるとした上で、大衆運動の次元で新たな領域を開いた」^①。青年期にマナール派のサラフィー主義の影響を受けたバンナーは、同胞団という運動組織でメンバーが行動するための思想として、イスラーム復興を具体化した。本章では、バンナー思想における信仰心と行動の重視について検討することで、メンバーの個人的信仰心がいかにして同胞団の活動へ関連付けられ、行動に転化されたのかを考察する。

第一節 信仰心の重視

イスラームの教えに基づく社会改革を目指す同胞団では当然のことかもしれないが、バンナー思想においては個人の信

仰心が重視され、それが同胞団活動の基礎と位置付けられている。メンバー個人の信仰心の確立なくして、組織としての同胞団の活動はあり得ないという考えである。「青年へ」では、信仰心は全ての活動の基礎とした上で、次のように述べられている。

次のような場合に、ある思想は成功するであろう。その思想を信じることが強固である場合、そのための誠実な献身が多くある場合、それへの情熱が大いなるものとなる場合、その実現のために自己犠牲と行動を伴う決意がある場合である。それは、四つの根本的な柱からなる。それは、青年の特性である信仰、誠実さ、情熱、行動である。信仰の基礎は賢明な心である。^②

信仰心を基礎として重視する記述は複数個所で見られ、例えば「クルアーンの旗下にあるムスリム同胞団」では、「信仰心こそ、我々が最初に備えるべきものである」^③とされる。また、それは「正統なイスラム (al-Islam al-hanafi)」に基づくものとされる。

我々はムスリムの個人・家族・国家を欲している。しかし、それ以前に、イスラム思想が広がり、全ての規則に影響を与え、イスラームの色に染めることを望んでいる。それがなければ、我々はどこにも到達できないだろう。我々は、正統なイスラームの根幹に基づき、独立した思考をすることを望んでいる。西洋の理論や志向に縛り付ける模倣の思想の根幹に依拠することを望んではない。偉大で栄光ある国家として、我々の生活の基本的要素や特徴によって、「西洋と」区別したい。その国家には、歴史的に最古で優れたしるしがあるのだ。我々は、正統なイスラームを受け継ぎ、その色に強く確実に染まった。それは、意識や感情に浸透し、心の奥底・核心にまで染みついた。^④

バンナーは、同胞団を「正統なイスラーム」から導き出された思想に基づく組織であると考え、同胞団への対応にしたがつて、人々を信仰者、躊躇する者、利己主義者、偏見を抱くものの四類型に分類している。

同胞団の教宣を信じ、言葉を信頼し、諸原則を高く評価し、そこに精神の拠り所と魂の信じる善を見出す者が、信仰者である。我々は信仰者に対し、急ぎ我々に加わり、行動をとにもするよう呼び掛ける。それは、ジハードの戦士の数を増やし、教宣者の声を

さらに高めるためである。行動の伴わない信仰は意味がなく、信奉者こその実現や自己犠牲に導かない信仰箇条は役に立たない。……アッラーの素顔がはつきりと分からず、我々の言葉に誠実さと利益の意味を見出さない者は、動揺し、躊躇する者である。……どのような利益が戻ってくるのか、貢獻がどのような見返りをもたらすのかが分からなければ、支援しないような利己主義者に対して、我々は「次のように」言う。憐みを。我々には何も報奨はないが、あなたが誠実にふるまえば、アッラーの報奨があるだろう。アッラーがあなたの心に善を見出せば、樂園が与えられるだろう。……ある者が我々を悪意でとらえ、疑念や不信の目で見るとすれば、その偏見を抱く者は必ず我々を暗い視線でとらえるだろう。混乱と疑念に満ちた言葉で我々を論じ、自惚れにこだわ、疑念に惑わされ、偏見に固執して、我々を否定するだろう。我々はこのような「偏見を抱く者」者も愛し続け、彼が我々の側に戻り、我々の教宣に満足することを望む。……人々がこれら「の四類型」から我々とともに一つになることを我々は望む。今こそ、ムスリムがその目的を認識し、指針を定め、目的に到達できるよう、努力する時である。混乱に満ちた暗愚・無思慮な思考・無知な精神・盲従、そして皆がただ従ってきたものは全て、信仰者の役には立たない。^⑤

ここでは、同胞団の思想を受け入れる者こそが信仰者であり、同胞団の活動に急ぎ加わることが訴えかけられている。このような記述から明らかのように、人々が信仰心を確立した上で、さらに同胞団の思想を理解・受容することが求められている。

第二節 行動主義

バンナーは個人の信仰心の重要性を指摘し、行動によって個人の信仰心を実践に移すことを奨励した。当時のエジプト社会では、近代化政策に伴う伝統的イスラームの解体によって、人々はかつてのようにギルドや農村・都市における地域共同体に依拠しながら、イスラームの教えに従って生活することはや不可能であった。そこで、バンナーは信仰心を確立した人々がイスラームの教えを实践する場として、彼の創設した同胞団という組織を示した。「青年へ」では、次の

ように同胞団へ加わり行動することの意義を説いている。

もし、あなたがたが我々の思想を信じ、我々の歩みに従い、我々とともに正統なイスラームのために進み、我々のものの以外の全ての思想を放棄し、あなたがたの信仰箇条のために全ての努力を捧げるならば、それはあなたがたにとって現世と来世での善となろう。また、アッラーが望むなら、初期のサラフたちの下で実現されたことを、あなたがたの下でも実現するだろう。あなたがたの中から生まれる誠実な行動者は、イスラームのためにあらゆる努力をするだろう。イスラームはその熱意を称揚している。また、行動者が誠実な者の中から生まれるなら、その行動者はイスラームの活性化のために身を捧げるであらう。^⑥

同様に、「クルアーンの旗下のムスリム同胞団」でも、人々に対して同胞団メンバーとして行動することの重要性を述べている。

努力を続けよ、行動せよ、アッラーはあなたがたの味方である。あなたがたの行動は、あなたがたを害さないであらう。今我々を支持している者は、すでに勝者である。敬虔だが今日は躊躇した者も、明日には我々に加わるだろう。もちろん、早く加わる方がより良い。……実践的な信仰者よ、忠実なジハードの戦士よ、我々の下へ集え。忠実な者たちがいる。ここには、「アッラーへ通じる」平らで真つすぐな道がある。「その道では」力と努力は、抑制されないのだ。^⑦

「青年へ」では、同胞団が最優先とする義務の一つとして行動を位置付けている。

我々同胞団の最優先の義務は次の二つである。一つは、人々に対して、「イスラームについて誤った」過剰や過少や混乱のないよう完全かつ明瞭な形で、この「同胞団が唱える」イスラームを説明することである。これは、我々の思想における理論的側面である。もう一つは、人々に対して、その「イスラームの教えの」実現を求め、実行を促がし、行動へ導くことである。これは、我々の思想における行動的側面である。^⑧

バンナーは、このような行動はイスラームの教えに適切に基づくものでなければならぬと主張する。イスラームの教えに基づく方策によらなければ、イスラーム諸国が西洋諸国による支配から脱却することは難しいと述べる。

ムスリム同胞団は、……人々にイスラームの諸原則を基礎とするため行動するよう求める。この基礎の上に、生活のあらゆる諸相における近代的東洋の復興が築かれる。また、ムスリム同胞団は、イスラームの諸原則と相容れず、クルアーンの裁定と衝突するような復興を、墮落し失敗したものと信じている。このような事態からは、国家は重大な犠牲を無駄に払うことになる。復興を望む国家にとって良いことは、イスラームの裁定に従って復興の最短の道を行くことである。^⑨

他方、バンナーは人々を行動へうながすだけでは不十分としている。人々の行動を正しく導くために、同胞団は正しく明確な指針を示さなければならないとする。

私は方策について話そう。それは三つの基本的原則であり、それに沿ってムスリム同胞団の思想は展開されている。

① 行動のための適切な方法論。同胞団は、それをアッラーの書「クルアーン」、彼の使徒「ムハンマド」のスナナ、イスラームの諸原則の中に見出した。我々は、ムスリムが活発で純粹であり、偽りや不実から大きく距離を置くことを義務にすると理解している。そして、そのような理解の下で、簡潔・広範・包括的にイスラームを学ぶよう努める。

② 信仰深い実践者。ムスリム同胞団は、アッラーの宗教「イスラーム」から理解したことを容赦なく的確に適用する。同胞団は、アッラーの恩恵の下で、自分たちの思想を信じ、その目的に満足し、アッラーに献身すればアッラーが自分たちを支えてくれると信じている。同胞団は、アッラーの使徒「ムハンマド」の導きの下で前進するだろう。

③ 信頼に値する確固たる指導力。ムスリム同胞団は自分たちがそれを持っていると気づいている。それゆえ、その指導に従い、その旗の下で活動している。^⑩

「青年へ」においても、「同胞団は、ムスリムが万事において指導者とならなければならないと、常に示そうとしている。彼らは、知識・力・健全さ・金銭などの万事において、指導力・行動・ジハード・先導を行わずに満足はしない。また、その遅れは全ての局面において、我々の思想に対する害悪であり、我々の宗教の教えに反するものである」と、同様のことが述べられている。「昨日と今日の間で」では、イスラームに基づく社会改革を成功させるためにどのような教宣

を行うべきかについて、それを信仰心に関連付けて示している。

我々は、いかにしてこれらの目標に到達するか？ 演説・言論・手紙・研究・講義・病気の診断・薬の処方。これら全ては単独では役に立たず、一つの目的を達成することも、諸目標のうちの一つへの呼びかけにもならないだろう。しかし、教宣は手段として疑いなくそれらを採用し、行動せねばならない。教宣において使用される一般的な手段は代替できず、変化せず、以下の三つの事項からはみ出さない。①深い信仰。②正確さの形成。③不断の作業。これらがあなたがたの一般的手段である。同胞団員よ。あなたがたの理念を信じよ。その周囲に集え、そのために行動し、その上に確固として立て¹²⁾。

このように、個人の信仰心を行動に転化することの重要性、および人々が同胞団に加わることで信仰を実践することの必要性について、バンナーは繰り返し主張している。マナール派は知的エリートを創出することにより、イスラーム復興を実現しようとした。しかし、その試みは知的エリートのサークル内にとどまり、社会に大きな影響を与えることはできなかった。それに対して、バンナーは一般の人々へイスラームによる社会改革を広く訴えかけ、そしてそのための行動を求めたのであった。この実践的な行動を重視する姿勢は、バンナー思想の特徴の一つとなっている。

第三節 段階主義

バンナーは、人々に対してイスラームの教えのために行動することを訴えた。同時に、バンナーはその実践方法についても詳しく説明している。「青年へ」において、その方法論は次のように明確に示されている。

ムスリム同胞団の方法論は、その段階が明確に定められている。我々は、自らが望むところを完全に知っており、またこの望みを実現するための方法を知っている。

①まず我々は、思想・信仰・人格・感情・行動・振る舞いにおいて、ムスリム男性を欲する。これは、我々の「考える」個人の形成である。

②次に我々は、思想・信仰・人格・感情・行動・振る舞いにおいて、ムスリムの家族を欲する。……これは、我々の「考える」家族の形成である。

③次に我々は、同様に全てにおいて、ムスリムの民衆を欲する……。

④次に我々は、ムスリムの政府を欲する。……我々は、あらゆる局面でイスラーム的な統治体制の復活と、この体制の原則に従うイスラーム政府の形成に尽力する。

⑤次に我々は、イスラームの祖国のあらゆる箇所と固く結束することを欲する。「現在、」イスラームの祖国は、西洋の政策により分割され、破綻させられている。……我々は、これらの国々の民衆の自由の「奪われた」長い苦難や、そこにおける他国の独断「的行動」に対して、口を閉ざすことはない。……我々は、その解放、救済、束縛からの自由、相互連帯のために努力する。

⑥次に我々は以下のことを欲する。……不幸にもイスラームの光が奪われ、その後不信仰者の手に戻ってしまった土地を、高くたなびくアッラーの旗が取り戻すことである。……我々の任務とは、正義と公正そして人々の間における「イスラームの」光と導きの普及に依拠し、イスラーム帝国の栄光を回復することである。

⑦次いで我々が欲するのは、我々の教宣が、世界中に広く知れ渡り、全ての人々に届き、遠隔の地にも普及し、全ての抑圧者を屈服させることである。^⑧

ここでは、バンナー思想の特徴の一つである段階主義を指摘することができる。イスラームの教えを実践し、イスラームに基づく社会改革を達成するためには、革命やクーデタのような実力行使による「上から」の奪権ではなく、個人の信仰心を出発点に「下から」段階的に改革を志向するという非急進的な方法論である。バンナーがこの段階主義を重視する理由は次のように推測できよう。第一に、当時の同胞団活動を実際に支えた人々は、国政を担う政治家やイスラーム的な教育を受けた知識人ではなく、エジプト社会の一般的な民衆であった。彼らに対して初めから政治活動や武力を伴う独立闘争を要求することは難かった。それゆえ、バンナーは一般的なメンバーの教育・組織化を重視し、段階的・漸進的に組

織目標を達成する方法論を選んだと考えられる。第二に、段階論を採用することで、メンバーの個人単位の信仰心をイスラーム復興という大きな枠組みの中に位置付けることが可能になる。個人、家族、社会、政府、イスラーム諸国家の連帯、西洋諸国からの解放へと至る段階主義的な方法論によって、個人的な信仰心が最終的にはイスラーム世界の再興にも繋がるという構図が示されるからである。

イスラーム復興という大きな目標に向かってともに歩む組織として同胞団が存在すると、バンナーは次のように主張する。

我々〔同胞団〕は、ムスリムを生み出すために、自分自身を育てる。我々は、ムスリムの家族を生み出すために、自らの家族を育てる。我々はムスリムの民衆を生み出すために、自分たちの民衆を育てる。我々は、ムスリムの民衆の一部である。我々は、目標の達成へ向けて、また自ら「勝手に定めたの」ではなくアッラーが我々のために定めた目標へ向けて、堅実な足取りで前進する。……そのために、すでに我々は、揺るがない信仰、止むことのない行動、弱まることのないアッラーへの信頼、アッラーが殉教者に会う最も幸福な日の「ための」心を備えている。また、同胞団の方法論は国内外を問わず政治の重要な要素であり、我々はそれをイスラームから導き出してきた。^④

個人の信仰心が国家にまで繋がっていることをより具体的に示す例としては、「新たな局面における我々の教宣(Da'wauna fi Tawr Jadid)」が次のように述べている。

自分自身から溢れ出るに違いないこの強い感情、我々が人々に呼びかけるこの精神的覚醒は、生活に実践的な繋がりを持つ必要がある。間違いなく、実践的な復興は個人、家族、社会を含むのである。

①行動の覚醒が個人に働きかけるだろう。すると、イスラームが各々に欲する時にいつでも、際立った模範「としての個人」が現れる。……我々はムスリムの兄弟に対して、次のことを義務とした。すなわち、彼らの精神力を高めるため、アッラーの命令に従うこと。彼らの覚醒を広めるため、知識が含意することを学ぶこと。彼らの意思を強めるため、イスラームの本来の性質に従って行動

すること。アッラーが彼らの身体を病氣や疾病から守るように、飲食や睡眠についてイスラームの規則を遵守することである……。

②この個人の改革は、家族にも影響する。家族は個人の集まりだからである。家族の柱となる男女が「自らを」改革するなら、両者はイスラームの諸原則に沿う模範的な家族となる……。

③家族が改革されれば、国家も改革される。国家は家族の集まりだからだ。家族は小さな国家であり、国家は大きな家族である。イスラームは、国家に幸福な社会生活の諸原則を伝えた。人々の間に兄弟の絆を作り、それを信仰の集団とした。^⑮

なお、この段階主義は、国際的な教宣の発展に関しても適用されている。「光へ向かって」では、次のように論じている。

イスラームは、イスラームの祖国の国境を拡大し、その自由と栄光のために善行と自己犠牲に努めてきた。イスラームの理解によれば、その祖国とは次の諸点からなる。

①まず、特定の国。②次いで、他のイスラーム諸国へ拡大する。それらは、全ムスリムにとつて祖国であり、住処となる。③そして、最初のイスラーム帝国へ拡大する。それは、初期世代のムスリムが高貴で偉大な血を持つて建国し、アッラーの旗を掲げた帝国である……。④そして「最後に」、ムスリムの祖国は、この世の全てを含むまでに拡大する。^⑯

段階主義は、本節で挙げた引用箇所以外にもバンナーの論考の各所に見出され、彼の思想における非常に重要な特徴となっている。そこでは、個人の確固たる信仰心をイスラーム復興という大きな目標に繋げるというバンナーの理論構成を指摘することができる。そして、その信仰心に基づきイスラームの教えを実践する場として、同胞団という組織が人々に提示されていた。

第四節 包括主義

バンナーは創設当初から、イスラームの教えを社会全体で包括的に実践しようとしていた。彼は、「イスラームを限定

的なものではなく、現世や来世の全てにおよぶ広範なもの^⑬として理解し、「生活のあらゆる諸相を対象とする包括的な制度^⑭」として、イスラームの教えを社会全体に適用する必要性を説いた。彼は、同胞団をイスラームの教えを実現するための組織とし、様々な活動を通じて社会全体におけるイスラーム復興を目指した。そこには、バンナー思想の特徴である包括主義を指摘することができる。

バンナーは一九三九年の第五回総会において、同胞団を次のように自己定義した。すなわち、①イスラームの原典へ帰する「サラフィー主義のダアワ」、②預言者のスンナに全てを立脚する「スンナの道」、③内面の浄化を目指す「スーフイーの真理」、④ウンマの統治・外交の改革を希求する「政治組織」、⑤責務に耐えうる強健な肉体を創出する「スポーツクラブ」、⑥知識と学習を推進する「知的・文化的団体」^⑮。⑦正しい財の活用を目指す「経済的企業」、⑧イスラーム社会の病弊を解消し、ウンマの快癒を目指す「社会思想」である。これは端的に言えば、イスラームの教えを実践するためなら、何でもするという考えである。

この自己定義に示されているように、バンナーにとって同胞団活動は特定の領域に限定されるべきものではなく、社会の様々な領域で展開されるべきものであった。同胞団メンバーは多種多様な活動に参加し、そこにおける行動でイスラームの教えを実践することが求められた。イスラームによる社会改革のためには、同胞団の活動を社会の様々な分野において、あらゆる人々を対象に展開しなければならないとバンナーは考えた。これに関して、バンナーは「我々の教宣」で次のように述べている。

同様に、今日の教宣の手段は過去のものとは異なっている。過去の教宣の手段は、説教や集会での言葉であり、書簡や演説原稿にある言葉であった。今日では、様々な出版物・雑誌・新聞・通信・劇場・映画・ラジオなどの手段がある。これらの全てが、男女を問わず、家庭・商店・工場・農場にいるあらゆる人間の心へ伝える手段として役立っている。そのため、提唱者たちはこのような伝達手段全てを巧みに利用し、それが望ましい結果に至るようにしなければならない。^⑯

バンナー思想が個人の信仰心を組織活動へいかにして転化したのかを考察する際に、この包括主義は非常に重要である。バンナーは、個人の信仰心を重視し、それをイスラーム復興のための基礎と位置付けた。そして、人々へ同胞団に加わり、イスラームの教えを実践するように訴えた。その実践のために段階主義に基づく漸進的な方法論を提示することで、メンバーの個人的な信仰心とイスラーム復興という大きな目標を関連付け、メンバーが身の回りから始められる容易なものであるとした。もし、バンナーがここで考えを止めていたならば、同胞団はこれほどの発展を遂げなかったかもしれない。というのも、人々に行動と同胞団への加入を訴えかけるだけの思想では、必ずしも人々をイスラームの教えを実践する行動へ導くことはできないと考えられるからである。当時、バンナー思想が革新的であつた理由は、実際に人々が参加できる多種多様な同胞団活動を提示し、メンバーがイスラームの教えを諸活動で実践できるという理論構成をした点にある。バンナーが理論と実践を組み合わせて、行動を実践する思想を構成したということが重要である。

実際に、二〇世紀前半の同胞団では様々な活動が行われ、そこへ多数のメンバーが動員されていた。他のイスラーム主義運動も実施していたモスク運営や学校運営は、同胞団も創設当初から実施していた。同胞団はモスクの修理・建設に積極的に従事し、必要に応じてイマーム（礼拝の導師）や説教師の派遣を行つた。^{②①} 教育活動はメンバーのみならず周辺住民にも開放されており、識字学校、金曜学校、クルアーン暗誦学校、幼稚園が運営され、イスラームをテーマとする講演が精力的に行われた。^{②②} 新聞、雑誌、小冊子の刊行も盛んで、同胞団の教宣を広めるための手段として重視された。^{②③}

同胞団では、青年メンバーが組織の次世代を担う人材として重視され、彼らを対象とする活動が活発であつた。大学などの教育機関で学生の組織化が行われ、組織化された学生メンバーはデモなどの街頭行動へ多くが動員された。また、身体強化と精神教育を目的に、青年メンバーを中心とするボーイスカウト活動、スポーツクラブの運営、キャンプの開催がなされた。^{②④}

同胞団は、社会問題へも積極的に取り組んだ。労働組合の組織化、^{②⑤} 就職斡旋などの失業者対策、労働者教育、労働関係

法研究などが挙げられる。^{②⑦} 貧困問題対策として困窮家庭への金銭的援助、農民の生活水準向上のための活動もあった。^{②⑧} 女性の地位向上のための委員会が同胞団にはあり、この委員会は一九四八年に五〇の支部と五〇〇〇人のメンバーを擁した。^{④⑩} 保健・医療活動では、無料診療所や病院の設立・運営、保健衛生知識の普及活動などが行われた。^⑪ また、同胞団は企業活動にも進出し、二〇世紀前半には七つの企業を経営した。企業経営を通じて、自主財政基盤の強化、民族経済の強化などが図られた。^⑫ また、興味深いものとしては、都市建設計画がある。これはオールド・カイロの一角に、理想都市建設を試みるものであった。^⑬

このように、二〇世紀前半の同胞団は社会で様々な活動を行っていた。筆者が別稿で論じたように、バンナーのジハード論では、同胞団の諸活動は社会改革を通じて祖国解放に貢献する「社会運動としてのジハード」として位置付けられ、ジハードを实践する方策として称揚されていた。^⑭ これは同胞団活動においてこそジハードというイスラームの教えを实践できるという理論構成である。メンバー個人の信仰心を組織活動、さらには軍事活動への献身に転化するものであり、個人の信仰心を組織活動に転化するバンナー思想の典型的な例として考えられる。ジハード論は、バンナー思想の下でメンバーを組織活動に動員する際、さらなる説得力を同胞団に与えるものであった。

① 小杉「ムスリム同胞団」五八頁。

② *al-Bannā*, "Ilā al-Shabāb," *Majmūʿa*, p. 91.

③ *al-Bannā*, "al-Iḥwān al-Muslimūn taḥta Rāya al-Qurʾān," *Majmūʿa*, p. 110.

④ *al-Bannā*, "Mushkiratunā fī Daw' al-Nizām al-Islāmī," *Majmūʿa*, p. 131.

⑤ *al-Bannā*, "Da'watunā," *Majmūʿa*, pp. 14-16.

⑥ *al-Bannā*, "Ilā al-Shabāb," *Majmūʿa*, p. 100.

⑦ *al-Bannā*, "al-Iḥwān al-Muslimūn taḥta Rāya al-Qurʾān," *Majmūʿa*,

p. 116.

⑧ *al-Bannā*, "Ilā al-Shabāb," *Majmūʿa*, pp. 93-94.

⑨ *al-Bannā*, "Ilā ayyi Shayʾu Nadʾū al-Nāss," *Majmūʿa*, p. 52.

⑩ *al-Bannā*, "Da'watunā," *Majmūʿa*, p. 33.

⑪ *al-Bannā*, "Ilā al-Shabāb," *Majmūʿa*, pp. 98-99.

⑫ *al-Bannā*, "Bayna al-Ams wa al-Yawm," *Majmūʿa*, p. 155.

⑬ *al-Bannā*, "Ilā al-Shabāb," *Majmūʿa*, pp. 95-97.

⑭ *al-Bannā*, "Ilā al-Shabāb," *Majmūʿa*, p. 97.

⑮ *al-Bannā*, "Da'watunā fī Tawr Jadīd," *Majmūʿa*, pp. 129-130.

- ①⑥ *al-Bannā, "Naiḥwa al-Nūr," Majma'ū'a*, pp. 70-71.
- ①⑦ *al-Bannā, "Da'watunā," Majma'ū'a*, pp. 18-19.
- ①⑧ *al-Bannā, "Risāla al-Ta'ālīm," Majma'ū'a*, p. 389.
- ①⑨ *al-Bannā, "Risāla al-Mu'tamar al-Khāmis," Majma'ū'a*, pp. 170-171.
- ②① *al-Bannā, "Da'watunā," Majma'ū'a*, pp. 17-18.
- ②② 同胞団のモスク運営について、Muhammad Sawqī Zakī, *al-Ikhwān al-Muslimīn wa al-Mijma'a al-Misrī*, Cairo: Dar al-Tawzī' wa al-Nashr al-Islāmīya, n.d., pp. 147-150.
- ②③ Zakī, *al-Ikhwān al-Muslimīn*, pp. 190-199. なお、識字学校では非識字者の成年層を対象にアラビア語の教授が行われた。金曜学校やクルアーン暗誦学校では、青少年層を対象にイスラームに関する学習が実施された。幼稚園では、年少者に対する基礎教育などのサービスが提供された。
- ②④ Zakī, *al-Ikhwān al-Muslimīn*, pp. 171-189.
- ②⑤ Lia, *The Society of the Muslim Brothers*, pp. 181-186; Mitchell, *The Society of the Muslim Brothers*, p. 180.
- ②⑥ Zakī, *al-Ikhwān al-Muslimīn*, pp. 159-178.
- ②⑦ 例えば、同胞団は一九四〇年代に、トラムなどの公共交通機関やカイロ・シユフラー地区の繊維業での労働組合組織化に大きな成功を収めた。
- ②⑧ *al-Ikhwān al-Muslimīn*, pp. 203, 205-219.
- ②⑨ Zakī, *al-Ikhwān al-Muslimīn*, pp. 225-229.
- ③① Zakī, *al-Ikhwān al-Muslimīn*, pp. 220-224; Husaini, *The Moslem Brethren*, p. 57. 七つの会社とは、イスラーム商會社、アラブ鋳業採石会社、イスラーム同胞団紡績繊維会社、イスラーム日刊紙出版社、アレキサンドリア商業エンジニアリング会社、商事代行会社、アラブ広告会社である。
- ③② Zakī, *al-Ikhwān al-Muslimīn*, pp. 156-157.
- ③③ 横田貴之「ハサン・バンナーのジハード論」。

おわりに

本稿では、二〇世紀前半のムスリム同胞団を指導したバンナーが、メンバーの信仰心をいかにして組織のための行動へ転化したのかについて、論究した。そこで明らかとなったのは、バンナーがマナール派の思想を踏まえ、当時の社会状況に応じた実践のための思想を新たに構築し、同胞団を運営するための思想としたことである。すなわち、バンナー思想で

め、同胞団の影響下でストライキが行われた。 Mitchell, *The Society of the Muslim Brothers*, pp. 280-281. また、同胞団が労働組合への影響力を有した業種として、煙草製造業や製油業が挙げられる。長沢栄治「『ムスリム社会運動』研究のために」小杉編『ムスリム同胞団』七八八三頁。

は、イスラーム世界が直面する諸問題を解決するために、イスラームの教えに基づく改革が必要とされた。そして、そのために個人の信仰が全ての基礎として位置付けられ、それを実際の行動に移す必要性が主張された。それは、個人から始まり、家族、社会、政府、イスラーム世界へ段階的に進められるものであった。そして、行動を実践に移すための場として、同胞団が当時のエジプト社会において展開していた多種多様な活動が提示された。筆者は、段階主義、行動主義、包括主義という特徴でバンナー思想を説明したが、それは信仰心を行動へ転化する思想、行動を実践させるための思想であった。二〇世紀前半の同胞団がこのような思想を構築できたことは、同胞団がエジプト最大のイスラーム主義運動に発展する一因になったと考えられよう。

本稿では、バンナーの論考の分析を通じて、彼の思想の特徴を明らかにした。しかし、バンナー思想に関する研究は端緒に就いたばかりである。彼の他の著作や伝記だけでなく、他の同胞団メンバーの著作の分析を通じて、創設から現在に至るまでの同胞団におけるバンナー思想の適用・実践について、さらなる検討を進める必要がある。このような研究を進めることで、バンナーのみならず同胞団に関するより深い議論が可能となり、現代中東における重要問題であるイスラーム主義についてさらに理解を深めることができることとなる。

(日本大学准教授)

pilgrimage items (white gloves and socks, a bag, sandals, sedge hat and wooden staff) with them. The wooden staff was said to be a 'must have' item. The insistence on the authentic costume and goods contradicted the modern idea of pilgrimage as leisure activity. In addition, as the organisation esteemed walking as the authentic method of pilgrimage; they attempted to discipline pilgrims' bodies performatively through both discourse and events such as the parade and training. It is worth noting that the oldest guidebook of the pilgrimage, issued in 1687, did not attribute special religious meaning or value to these objects or to walking. The insistence of the organisation on authenticity is not grounded in historical fact. The discourse of authentic pilgrimage by the organisation became linked with governmental policy after the late 1930s and during wartime to discipline nations' bodies and daily life. Here too the mundane produced the authenticity of the pilgrimage.

The "Thought into Action" of Ḥasan al-Bannā,
the Founder of the Muslim Brotherhood

by

YOKOTA Takayuki

The goal of this article is to employ an analysis of the thought of Ḥasan al-Bannā, the founder of the Muslim Brotherhood, to deal exhaustively with how he attempted to transform the faith (*īmān*) of the members of the Brotherhood into action on behalf of the organization. In this article, I locate the significance of the worship in the hearts of Muslims, including prayers to Allah, as confirmation of faith, and examine the link between the personal faith and group action in the thought of al-Bannā.

The Muslim Brotherhood is known as Egypt's largest Islamist movement. It was formed in 1928 by al-Bannā with the goals of reforming society on an Islamic basis and establishing an Islamic state, and al-Bannā served actively as its first Supreme Guide. The Brotherhood grew quickly during the first half of the 20th century. In the late 1940s there were 500,000 members and an equal number of supporters out of a total population of 20 million, making it the nation's largest Islamist movement with approximately 2,000 branches.

Al-Bannā remained active as the founder and Supreme Guide of the

Brotherhood until his death. His thought became the guiding principles for the activities of the organization at the time and was the theoretical support of its rapid growth. It has been pointed out that the theoretical importance of al-Bannā is the fact that his thought, which was based on that of the *al-Manār* group of Islamic revivalists who were primarily from the intellectual elite, was constructed to put the Islamic revival into practice as an activist organization built on the people's interests. Al-Bannā constructed his Islamic revivalist thought to be put into practice chiefly by ordinary members of the organization from the Islamic revivalist thought that had previously been the property of the intellectual elite, developing the Brotherhood into an organization with great power to mobilize its membership.

Given the strength of his theoretical influence, al-Bannā has been recognized as an important figure in present-day Islamic political thought and movements. Likewise, in today's Muslim Brotherhood, al-Bannā's thought is emphasized as the guiding principle of the organization. It can be rightly claimed that in order to understand the Brotherhood, it is still necessary to understand the thought of al-Bannā. However, reviewing the scholarship, one sees there have been few studies concerned with al-Bannā despite his importance. This article attempts an examination of his thought in order to fill this gap. In this article, I employ the *Majmū'a Rasā'il al-Imām al-Shahīd Ḥasan al-Bannā*, a collection in twenty volumes of al-Bannā's theoretical works as my main source. The work was compiled after his death mainly from speeches and pamphlets composed in al-Bannā's lifetime for members of the Brotherhood. Based on these works, I exhaustively examine how al-Bannā linked the faith of the members to action on behalf of the organization.

What has become clear through these arguments is that al-Bannā's newly constructed thought was based on that of the *al-Manār* faction, that it was to be put into practice according to contemporary social conditions, and that it was intended for the operation of the Brotherhood. In other words, in al-Bannā's thought, reform based on Islamic teachings was necessary for a solution to the problems that faced the Islamic world. Then, to that end, individual faith was to be made the foundation for everything and he argued the necessity of propelling it into practical action. This began with the individual and progressed in stages to the family, society, government and the Islamic world. Then, the Muslim Brotherhood, as the site to propel action into a practical form, proposed a variety of activities to be developed in contemporary Egyptian society. I have explained the gradualist, activist and

totalizing beliefs that characterize al-Bannā's thought, and this thought was one to propel faith into action and action into practical effect. It can surely be surmised that the ability of the Muslim Brotherhood to construct this thought in the first half of the 20th century was a cause of the development of the Brotherhood as the Egypt's largest Islamist movement.

The Prayers and Anger of Hiroshima: Focusing on the Movement to Protect Atomic-Bomb Orphans and Club Movements

by

YAMAMOTO Akihiro

This article is an attempt to elucidate the process of the fixing of the image of the city of Hiroshima. The Hiroshima described in newspapers and magazines published in Tokyo and the Hiroshima recounted by the residents of the city do not necessarily match. The image of Hiroshima differs according to medium that is used or who is speaking. Then, as a matter of course, as the times change, the image also changes. In this article, I focus on both the Hiroshima described in the mass media outside of Hiroshima and the practical reality of the Hiroshima described by the residents within the city. The period of this research is from the dropping of the atomic bomb into the first half of the 1950s.

In the first section, after summarizing the system of censorship that regulated speech under the occupation, I examine descriptions of bombed out Hiroshima from mass media reports, comments of intellectuals, and widely seen films. When the mass media of this period described Hiroshima, examples of "anger" being emphasized are seldom seen. Hiroshima was described as a site of suffering, and there was a tendency to describe those who died as a result of the atomic bombing as the noble dead who brought about peace.

In the second section, I focus on the children who were called the atomic-bomb orphans, and while elucidating the actual circumstances of their lives, I note the attempts of governments and volunteers on behalf of the atomic-bomb orphans. Elements of both "anger" and "prayers" are absent from the post-war collections of the writings of the atomic-bomb orphans. However,